Kwansei Gakuin University

初期ポーランド王国資本主義とワルシャワ

藤　井　和　夫

I

一般にある国が封建制の社会の中からまがりなりにも資本主義への歩みを開始し新しい産業社会へのスタートを切るためには，その国の内外にあって多様な前提条件を満たし数多くの困難を克服せねばならない．そこには基本的な主体的条件と，絶対的な客観的条件が不可欠である．しかしながら，そうした諸条件の現われ方はそれぞれの国において全く個別的な様相を呈するものであり，克服すべき困難も各国特有の強度と構造をもつ．つまり一国の工業化の過程は，あらゆる意味においてその国独自の容貌をもたざるを得ないのである．

19世紀初頭のポーランドは，政治的には中部ヨーロッパ大陸に覇を競う列強の悲惨な犠牲者であり，経済的には躍進しつつある西欧先進工業諸国の後塵を拝する後進国であった．中世以来の自由主義的，ロマン主義的な文化の伝統も，民族独立をめぐる国民運動のただ中にようやく脈打っていたにすぎない．しかしながら1815年のポーランド王国の成立が，この国にひとつの経済的な新しい発展の可能性を与えることになる．やがて19世紀後半以降この地に開花する資本主義工業発展の要因は，基本的には初期ポーランド王国政府の主体的な工業育成策[1]と，ロシア支配＝結合がこの国にもたらした客観的諸条件[2]にあると言え

1）その意義および具体的な内容と成果については拙稿「ポーランド王国繊維工業の成立における政府の役割」（『社会経済史学』投稿中）—以下拙稿〔5〕と略記—参照．なおここに言う「初期ポーランド王国政府」とは具体的には1815—30年の王国政府を指す．同稿，特に4節結語参照．

2）具体的にはロシアによる保護関税政策およびポーランドのそれへの一体化，そしてその結果としてのポーランド王国工業のロシア市場獲得が挙げられる．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

よう．そしてその基底には当時のポーランド社会の内包するダイナミズムが存在していたのである．

ポーランド王国における工業発展の特色は，繊維工業を新しい産業の中核としながら比較的短期間の内に量的な拡大と並んで手工業段階から近代的工場制への質的発展を為し遂げたことであり，その姿は最も典型的には王国最大の繊維工業地帯たるウッジ地帯に現われている．同地帯を中心とした繊維工業の発展についてはすでにいくつかの論文によって分析を加えてきたが[1]，本稿においては少し視点を変えて，ウッジ地帯と並んで経済的に大きな意味をもつワルシャワ工業[2]の実態を探ることにより，19世紀におけるポーランド資本主義—特に世紀前半のその成立期—の特質を全体として明らかにするための手掛りを得たい．さしあたって王国成立から1850年代に至るまでのワルシャワの都市としての成長とその工業の発展が分析対象となる．

断わるまでもなくワルシャワは16世紀末以来ポーランドの首府であり，経済のみならず政治・文化の中心地でもあって，むしろそういう側面にこそこの都市本来の機能と意義があったとも考えられるが，本稿においてはポーランド資本主義の特質を探るという課題に即してもっぱらその経済的側面だけを取り上げてみたい．しかし後に見られるように他の側面も当然強くワルシャワ工業に刻印を押しているのであって，そのことがワルシャワの経済に独特の性格を与えている．

さらに付け加えると，ポーランド王国の主要工業地帯というものを考えるならば，ウッジ地帯，ワルシャワと並んで，王国南部キェルツェ周辺のスタロ・

1) 前掲拙稿〔5〕の他，拙稿「ポーランド王国における繊維工業の成立—ウッジ地帯の労働者構成（1815—1870）—」，『関西学院経済学研究』，第9号，昭和51年，同「ポーランド王国における工業都市の成立—ウッジ繊維工業地帯4都市の事例—」，『関西学院経済学研究』，第10号，昭和52年，同「（研究）19世紀ポーランド王国の資本主義工業—ウッジ地帯における繊維工業の成立—」，『関西学院大学経済学論究』，第34巻第3号，昭和55年，同 'Przemysłowcy włókiennicy okręgu Łódzkiego w okresie powstawania kapitalizmu Królestwa Polskiego', "Kwansei Gakuin University Annual Studies", vol. XXX, 1981年，—以下各々拙稿〔1〕～〔4〕と略記—.

2) もちろんここで言う工業とは便宜的な名称でしかない．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ポルスキ地帯および上シレジア地方と国境を接する王国南西部のソスノヴィエツ等を中心とするドンブロヴァ地帯を挙げなければならない．スタロ・ポルスキ地帯はかなり早くからポーランドにおける伝統的な木炭製鉄の中心地帯であり，それはやがてドンブロヴァ地帯の石炭による近代的な製鉄業に受け継がれてゆく．両者は各々ウッジ地帯やワルシャワとは全く別の独自の性格をもっており，主として重工業部門の担い手としてポーランド資本主義の一方の柱になってゆくのであるが，その重要性が増すのはかなり後のことであって少なくとも19世紀前半においては工業部門としての経済的比重も成立期ポーランド資本主義におけるその意義も比較的に小さいものである．従って両地帯の分析はさしあたり今後の課題として，本稿では従来のウッジ地帯の分析とからめつつワルシャワ工業を見てゆくことにしたい．

Ⅱ

ワルシャワは1596年のズィグムント３世ヴァーザによる遷都以来ポーランドの首府となる．それ以前の初期の歴史は明らかではないが，少なくとも10世紀にはこの地にすでに農園が存在していたようであり，以後農業と林業を中心とする小村落がヴィスワ川左岸に発展してゆく．やがて地理的な好条件のおかげで商業取引の中心地としての役割が増大し，それにつれてその政治的重要性も高まっていった．遷都以降は「波瀾の国」ポーランドの首府にふさわしく激動する歴史をたどることになる．ワルシャワは近郊農産物の集散地，遠隔地商業の中継取引地としての発展によって17世紀半ばに最初の最盛期を迎え人口も２万人を数えたが，その直後のスウェーデン軍の全土侵略以降国力は急速に衰えて18世紀まで往時の勢力を回復し得なかった．ポーランドのいわゆる「啓蒙時代」と呼ばれるこの世紀半ばに至ってようやく国土に再び平和が訪れ，ポーランド最後の王スタニスワフを中心に諸々の政治的・経済的改革が試みられるとともに，ワルシャワの人口も10万人を越えるまでに増加した．しかしこの王国再建の試みも結局成功せず王国は世紀末にロシア・プロイセン・オーストリア

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

三国の分割によってついに減んでしまう．

ポーランドは1815年にロシア支配下とは言えポーランド王国としていちおう再出発することとなったが，その当時のワルシャワは分割時代の蜂起やそれに続くナポレオン戦争によって極めて大きな打撃を被っていた．この時代の信頼すべき人口統計を得ることは困難だが，若干の研究にもとづく19世紀前半のワルシャワの人口が第1表に示してある．それによれば，1793年の第2次分割以前の人口約10万人の水準から王国成立当初は約8万人へと人口が減少していることがわかる．やがてポーランド王国に先立って1807年に成立するワルシャワ公国時代にポーランドにおける経済的変革の端初が開かれることになり，それを受け継ぐ初期ポーランド王国の諸政策が1816年以降になってワルシャワの人口増加となって実を結んでいる．

しかし1830—31年のロシアへの反乱「11月蜂起」が再びワルシャワの人口増加を阻んだ．市内の士官学校を発火点に武装市民を中心とするこの蜂起はその戦闘による直接的な人的・物的損害[1]もさることながら，蜂起鎮圧後のロシアによる徹底した反動的弾圧・報復政策によって回復しつつあったポーランド経済を再び低迷と混乱に導く結果となった[2]．そのため1831年以降の人口停滞が示しているように，ワルシャワにも多数の市民が市から退去あるいは国外へ亡命するなど直接の影響が及んでいる．さらにその後打ち続いた天災や伝染病の蔓延が人口停滞に拍車をかけた．蜂起直後から食料不足や家畜の伝染病に悩まされていたワルシャワに1837年コレラが流行する．おまけにこの年と翌38年は大飢饉の年でもあった．1844年に今度は大雨とあられによる洪水の被害が続き，翌年には再び不作とともに国内の一部にチフスが広がった．伝染病の蔓延はその後も1848，49，53，55年と続発している．国内が不作から開放されるとともに

1） ワルシャワ市内の焼失家屋221戸（損害額1,154,842 zł），被害総額は5,312,949 złに達し，主な道路はすべて破壊された．Szczypiorcki, *op. cit.*（第1表出所参照），s. 13.

2） 弾圧と報復は政治・経済・文化のあらゆる面にわたったが，経済的に最も影響の大きかったのは王国政府の改組・権限縮小とポーランドに不利な新関税協定であった．そのために特に羊毛工業は大打撃を被った．拙稿〔3〕44—45頁，拙稿〔5〕1節序参照．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

第1表 ワルシャワの人口

1787年	96,000人	1842年	142,492人
1792	98,376[1]	1843	151,740
1797	76,000	1844	154,078
1800	63,359	1845	163,624
1805	80,000	1846	165,130
1810	77,727	1847	166,997
1816	81,000	1848	163,818
1818	96,404	1849	165,154
1822	112,000	1850	163,597
1825	126,433	1851	164,115
1827	131,000	1852	157,871
1829	139,654	1853	158,301
1830	145,000	1854	157,436
1831	123,535	1855	156,562
1832	126,775	1856	156,072
1833	129,705	1857	158,120
1834	136,062	1858	158,817
1835	135,577	1859	161,361
1836	134,882	1860	162,805
1837	136,102	1861	230,255[2]
1838	137,828	1862	207,986
1839	139,205	1863	211,593
1840	139,591	1864	222,906
1841	140,471		

（注） 1） これはS. Szymkiewicz による数字であるが，H. Drzażdżyńska によれば115,339人．
2） 1861年に急に人口が増加しているのは，同年以降登録方法に変更があって定住人口のみならず非定住人口も加えてあるからである．

出所： 1787, 97, 1805, 16, 22, 27年はB. Grochulska, Warszawa jako środowisko demokratyczne i gospodarcze (1770—1830), "Warszawa XIX Wieku", zeszyt 3, Warszawa 1974, s. 16. 1792, 1810, 25年はI. Pietrzak-Pawłowska, Ekonomiczne warunki przemian strukturalnych w społeczeństwie Warszawy XIXw., "同上書", s. 33, 35. 1800, 18年はR. Kołodziejczyk, Kształtowanie się burżuazji w Królestwie Polskim(1815—1850), Warszawa 1957, s. 51. 1829年以降はA. Szczypiorski, Warszawa, jej gospodarka i ludność w latach 1832—1862, Wrocław 1966, s. 235による．

ワルシャワの人口が再び上昇に向かうのはようやく1856年以降のことである[1]．蜂起以後のポーランド王国工業は30—40年代を通じて低迷するが，そのひとつ

1） 以上はSzczypiorski, *op. cit.* s. 13—15による．当時飢饉による食料不足の他に，同じく不作に悩むプロイセン領内からの流入民を抱えて政府は各地で道路工事や運河開鑿等の失業対策を講じねばならず，ワルシャワでも市の収入が激減して1845年にポーランド銀行への債務利子すら支払われぬ程であった．*Ibid.*, s. 13—14.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の要因として，工業育成策の中断や不利な関税状況の他に，こうした飢饉や伝染病の蔓延による国内市場の縮小があったことも忘れてはならない．

ワルシャワは言うまでもなくポーランド王国最大の都市である．ちなみに1827年王国内には451の都市が存在していたが，392の都市は人口3千人以下でそのうち175都市は人口千人にも達していない．人口1万人以上の都市はワルシャワの他ルブリン（1万3千人），カリシ（1万2千人）の2都市にすぎず，5千人以上の都市でも3市を加えてわずかに9都市を数えるだけである[1]．当時ウッジ市は急速に成長しつつあるものの人口4,273人（1828年）であった[2]．しかし1858年に至るとワルシャワは16万人近くに達し，ウッジも人口29,450人に急増しているのに対し，ルブリン，カリシの両市はそれぞれ1万6千人，1万2千人の水準にとどまっている[3]．つまり19世紀半ばになると，ポーランド王国資本主義工業の発展に伴ってその担い手ウッジとワルシャワが他の都市に抜きんでた発展を示すのである．

ここでワルシャワの人口の内部構成について少し触れておきたい．ワルシャワの人口構成には市の経済的性格を反影してひとつの大きな特色が見出される．それはユダヤ人の比重の高さである．ワルシャワ公国以来の移入手工業者優遇策によってポーランド王国は多くの移住者を国内に招き入れることになったが[4]，ワルシャワにおいて目立つのはむしろ国内からのユダヤ人の集中であった．ワルシャワ公国時代の1810年，ワルシャワの人口77,727人のうちプロテスタントは8.8％（公国全体では8.6％）に対しユダヤ人は28.1％を占めていた．当時公国全体ではユダヤ人の比率が7％にすぎなかったことを考えればワルシャワへのその集中の激しさが知られよう[5]．以後以後断片的に得られるワルシャ

1） Kołodziejczyk, *op. cit.*（第1表出所参照），s. 50.

2） J. Raciborski, Łódź w 1860 roku, "Rocznik Łódzki," t. II, Łódź 1931, s. 414. なおウッジ市の人口増加については拙稿〔3〕45—46頁参照．

3） T. Łepkowski, Początki klasy robotniczej Warszawy, Warszawa 1956, s. 30. なお Pawłowska, *op. cit.*（第1表出所参照），s. 43—44 参照．

4） ウッジ市への流入者を見ると，それはもっぱらプロテスタントを中心とする手工業者達であった．拙稿〔1〕69—75頁，拙稿〔3〕47—48頁．

5） Pawłowska, *op. cit.*, s. 33.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ワ人口に対するその比率は，1830年21.3%，31年25.4%，32年25.2%，39年26.5%，47年26.5%，55年26.2%，56年26.2%，57年26.1%，59年26.4%，64年32.7%と少しづつ増加している[1]．

ユダヤ人は当初その市民権獲得に様々な制限が設けられていたが，1809年3月20日の法令によって特に6万zł以上の資本を所有する者や工業・商業・銀行を営む者について制限が大幅に緩和された[2]．従ってワルシャワへのユダヤ人の集中はワルシャワ商工業の発展と密接に結びついていたと言え，実際ワルシャワの発展における彼らの重要性には極めて大きいものがあった．1839年と62年におけるユダヤ人の職業別構成は第2表のとおりであるが，そこで目立つの

第2表 ワルシャワ市ユダヤ人の職業別人口

人（%）

	1839年	1862年
金融・不動産	535（ 4.4）	1,575（ 9.0）
商業	3,857（ 31.7）	6,651（ 37.9）
工業・手工業	2,602（ 21.4）	4,169（ 23.8）
自由業・聖職者	249（ 2.1）	838（ 4.8）
下僕・労務者	4,679（ 38.5）	1,940[1]（ 11.0）
無職	231（ 1.9）	1,526（ 8.7）
農業	—	170（ 1.0）
その他	—	680（ 3.8）
職業人口計	12,153（100.0）	17,544（100.0）
ユダヤ人人口計	36,529	47,305
市内総職業人口	54,161	62,042
市内総人口	139,205	142,000

（注） 1） 下僕のみ
出所：Szczypiorski, *op. cit.*, s. 267.

は商業従事者の数とともに彼らの工業への関与のあり方である．ユダヤ人商人の活動とその重要性については改めて強調する必要もないであろう．ワルシャワにおける大商人もそのほとんどをユダヤ人と一部の外国人が占めていた[3]．ま

1） Szczypiorski, *op. cit.*, s. 235.
2） Pawłowska, *op. cit.*, s. 33.
3） ちなみに第2表中のユダヤ人商業従事者はワルシャワ市商業従事者のそれぞれ1839年63.9%，62年62.6%にあたる．Szczypiorski, *op. cit.*, s. 267.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

たワルシャワ以外でも商業的な性格の強い都市においてはユダヤ人人口の割合は非常に大きく，特に東部のいくつかに都市ではワルシャワにおけるその比率を凌いでいる程である．

しかし他方，ワルシャワにおけるユダヤ人の工業関係従事者の多さは注目に値する．たとえば1860年頃のウッジ市におけるユダヤ人の割合も15—20％に達しているが，1864年の繊維工業労働者中のその比率はわずか6％にすぎず，そこではむしろ43％を占めるプロテスタント（ドイツ方面からの移入者）の重要性が際立っており，ユダヤ人は「商業におけるその重要性に比して工場労働者としてはあまり意義を持っていない[1]」と考えられる．ところがワルシャワにおいては工業従事者はユダヤ人勤労者の20％以上に達し，労務者をも合わせると非常に大きな割合を占めることになる．その理由はいったい何であろうか．まず第1に考えなければならぬのは，ワルシャワ工業のもつ伝統的，小規模，広範囲の工業部門というその特色であり，多くのユダヤ人が自らの資本をもって工業経営に参加していったという点である[2]．第2に，ワルシャワのユダヤ人は大きく見て二つの階層に二極分化し始めており，一方で一部のユダヤ商人・資本家がますます富裕化しながら，他方で極めて貧しい大量のユダヤ人大衆が集積されつつあった．後者は日雇いやワルシャワのブルジョア的都市生活に付随する家内使用人・下僕としてようやく日々の糧を得ながら都市の最下層を形作っていたのである．この点はいわば「純粋な工業都市」ウッジなどとは極めて趣きを異にしている点であろう．

次にワルシャワ人口の全体的な職業構成を見ておこう．第3表はいくつかの年度についてそれを示したものであるが，各々統一的な統計方法や分類基準があったわけではなくやや信頼性に欠ける点も含まれる．それでも大まかな特色と傾向は知り得よう．断わるまでもなくワルシャワにおいて農業はほとんど意味をもたない．常に最大の割合を占めているのは工業部門であって，ここに工

1） 拙稿〔1〕，75頁．
2） そこには後述するワルシャワにおける「営業の自由」という背景もあったであろう．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

第3表 ワルシャワの職業別人口

人（%）

	1827年	1839年	1854年	1862年
金融・不動産	4,758（7.5）	3,820（6.8）	4,350（10.8）	3,180（5.1）
商業	6,973（10.9）	6,102（10.9）	5,677（14.2）	12,594（20.3）
工業・手工業	14,603（22.9）	11,818（21.1）	13,352（33.3）	17,747（28.6）
自由業	921（1.5）	1,207（2.2）	2,613（6.5）	3,232（5.2）
官吏	4,293（6.7）	2,604（4.6）	4,904（12.2）	6,576（10.6）
家内下僕	23,333（36.6）	20,044（35.7）	8,411（21.0）	8,714（14.1）
日雇い	6,211（9.8）	6,153（11.0）	31（0.1）	
農業	350（0.5）		285（0.7）	1,325（2.1）
無職・不明	2,255（3.5）	4,371（7.8）	530（1.3）	8,674（14.0）
職業人口計	63,697（100）	56,119（100）	40,153（100）	62,042（100）
市内総人口	131,465	139,205	157,436	207,986

出所： Szczypiorski, *op. cit.*, s.259.

業都市としてのワルシャワの面目が現われている．しかもその比重は時代とともに高まってゆく．一方商業も大きな割合を占めそれも次第に増加している．王国工業が発展してゆくにつれ工業製品や原料の取引中心地としてのワルシャワの重要性はますます高まってゆくのであり，この商業従事者数増大の内容を見れば，その取扱商品および交易範囲の拡大と取引規模の増大が伴っていたはずである．

首府としての性格上ワルシャワの行政組織はもともと大きなものであったが，ロシアが直接ポーランド支配を強めようとすれば自ずから軍関係を含む支配機構としての官僚組織は一層巨大化する．表中の官吏の増加がそれを示す．一方で，ワルシャワは文化の中心地でもあった．表の自由業の内容は雑多であるが，教育機関の充実と並んで，世紀半ば以降になると音楽・演劇・バレエ等の芸術に関係する人口は想像以上の増加を示すことになる．多様な顔をもつワルシャワのひとつの側面と言えよう．

日雇の数については特に1854，62年のデータに疑問が残る．他の種々の資料が示すところからすると未熟練労働者のワルシャワへの流入は増加し続けてい

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

第4表 ワルシャワの定住・非定住人口

人

	総人口	定住人口	非定住人口	非定住人口の割合
1818年	111,014	96,404	14,610	13.2%
1833	142,755	122,755[1]	20,000	14.0
1857	198,120	158,120	40,000	20.2
1865	243,512	182,772	60,740	24.9

（注） 1） 第1表と矛盾が見られる.
出所： Szczypiorski, *op. cit.*, s.239.

たはずであり，そのことは第4表のワルシャワ非定住人口[1]の増加を見ても知られ得る．前述の理由によって1830，40年代ワルシャワへの人口流入は停滞するがその後特に1858年以降流入の新しい波が生じる．公式の統計に日雇いとして現われる数字は必ずしも未熟練労働者数の実態を表わしているとは言えず，たとえばT. Łepkowskiは家族を除く日雇いの数を，1810年4,842人（定住・非定住を合わせたワルシャワ総人口の6％），27年7,000～12,000人（同4.8～5.5％），47年10,000～12,000人（同5～5.5％），61年15,000～20,000人（同6.5～8.7％）と推定している[2]．この日雇いはウッジ市などではもっぱら繊維工業に雇用されているが，ワルシャワにおいては繊維に限らず金属・食品・運輸・建設業等の幅広い分野で働いていたものと思われる．

Ⅲ

ワルシャワは王国の中では都市としての歴史も古く，経済的にもその商工業は他の都市や地帯には見られぬ伝統と歴史をもっている．しかし中世以降長期にわたる国力の低下と外国からの侵略を受けてきたポーランドの歴史は，そのままワルシャワ商工業の未熟・停滞ともなって現われていた．ここに新しい経済活動の活気が訪れるのはやはり18世紀半ばのことになる．

1） ここに言う定住人口 ludność stała および非定住人口 ludność niestała というのは住民登録上の法制的な分類であるが，実際には非定住といっても長年にわたってワルシャワに住みついている人々の数もかなり多かった．

2） Łepkowski, *op. cit.*, s. 203.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

当時国内経済再建のひとつとしてワルシャワにも手工業の育成やマニュファクチュアの導入がいろいろと試みられた．しかしその実態を探るのは資料の制約上極めて困難である．ただ，1720年に孤児院併設の病院内に司教 Szembek の手により設立されたワルシャワ最初の毛織物マニュファクチュア（1736年以降衰退[1]）や，国王のイニシァティヴで1766年に設立された画期的な羊毛マニュファクチュア "Kompania Manufaktur Wełnianych"（1770年頓座[2]）等の運命を見てもわかるように，こうした試みはほとんど成果をあげることなく多くは数年たらずで失敗している．その原因は，技術の未熟さ，製品販売市場の欠如，経営資本の不足等の経済的要因であったが，他方で世紀末のポーランド分割という政治的破綻が工業の胎児たるこれらのマニュファクチュアを保護し援助するための指導力およびその機関の準備を不可能にしたという点も忘れてはならない．それは結局ワルシャワ公国を経て，初期ポーランド王国政府の工業育成策の課題となってくるのである．

ともあれ18世紀末のワルシャワ手工業およびマニュファクチュアを見ておくと，主として富裕市民層を対象とした奢侈品生産を中心に，先に挙げた羊毛マニュファクチュアの他，Rehan の毛織物製造所，Dangel の馬車製造所，約100人を雇用する最大のマニュファクチュアのひとつ Blanek, Dekert, Rafałowicz の煙草製造所，Solec（ワルシャワ南部地区）に存在したいくつかの澱粉製造所，Praga（ワルシャワのヴィスワ川右岸地区）に点在した革なめし場，それに約30のレンガ製造所，約60のビール醸造所，さらに Dytrych の釣鐘鋳造所，貨幣鋳造所等が挙げられる[3]．

ポーランド王国が成立すると公国時代にはまだほとんど成果をあげ得なかった法体系の整備や工業育成策がようやく具体的な形で結実し始める．ワルシャワにおいても，微弱ながら続いてきた手工業のギルド的伝統が1816年12月31日

1） I. Turnau, Wytwórczość tekstylno-odzieżowa w manufakturach warszawskich w XVIII wieku, "Przegląd Historyczny," t. XLVIII, zeszyt 4. Warszawa 1957, s. 730.

2） 拙稿〔5〕2節参照.

3） Łepkowski, *op. cit.*, s. 32.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の決定によって大きな変容を受け，次いで1821年以降導入された営業活動の「認可制」がむしろギルド的特権や制限を廃して完全な営業の自由をもたらすこととなり[1]，ここに本格的なマニュファクチュア時代の幕開きを迎えることになった．ただしその場合他の地帯におけると同様に，一方で広範に手工業を存続させつつマニュファクチュアの展開や一部での大工場の導入が見られたのである．ちなみに工業と手工業の生産額の比率を示すと第5表のようになる．これ

第5表 工業・手工業の生産額

千ルーブル（%）

	1846年	1847年	1851年	1862年	1913年
工　業	1,699 (39)	1,960 (45)	2,873 (49)	6,050 (56)	116,600 (90)
手工業	2,581 (61)	2,586 (55)	2,926 (51)	4,681 (44)	13,000 (10)
総　計	4,280	4,546	5,799	10,731	129,600

出所： Łepkowski, *op. cit.*, s. 86.

以前の時期については全く資料がなく，表のデータもその分類基準等についてやや信頼性に欠けるが，ともかく19世紀半ばまでの手工業の優位と世紀半ばのその地位の逆転がうかがわれる．ポーランド王国の経済が資本主義としてのいちおうの完成を見るのは1860年代以降のことに属するが，その時でも手工業が完全に衰滅してしまうわけではない．

ワルシャワ工業の歴史のひとつの特徴はその幅広い部門構成である．ウッジなどと比較するとこの都市の消費的性格を反影して食品工業の重要性が比較的に高い．1816年にはビール醸造業のみで計1,000人の雇用者があったと言われる．もっとも1822年に週2万7千リットルのビールを製造したDziałyńskiの醸造所を例外として，それらは個々には非常に小規模な製造所であって生産総額もあまり大きくない[2]．「11月蜂起」直前になるとそれでもSchaefferとGlimpfの黒ビール醸造所（1827年創立，29年拡張），Sommerの黒ビール・英国

1） Pawłowska, *op. cit.*, s. 36.
2） Łepkowski, *op. cit.*, s. 36.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ビール醸造所（1827年設立），他にも Hall, Weiss, Suchocki 等の大きな醸造所も生まれ，ワルシャワ市内外に数十の醸造所を数えて一種のワルシャワ・ビール工業の黄金時代を迎えた[1]．他方1828年には貴族・地主・商人の資本を集めて5階建ての蒸気製粉所が Solec に設立されたが，そこでは1831年に時間当り50 korzec の[2]小麦が蒸気力を使用して製粉されている．

以上の他にもワルシャワに特有の高級消費財製造部門が存在するが，しかし新しい時代のマニュファクチュアの中心は何と言ってもやはり繊維業ということになろう．この時代の経済の活発化は主としてこの分野において見られる．ワルシャワにおいては政府が「最初の企業家」として大きな役割を果した．1817年 Solec に政府の手で絨緞工場が設立され，そこで106人の労働者が12台の織機とともに生産に従事し，翌年には120人の労働者によって羊毛製絨緞その他9千エルが生産された．同工場は1826年に Geysmer に払い下げとなっている．以後は私企業として，1827年労働者数260人（工場外の紡績工150人を含む），28年同320人，30年には織機37台による生産が行なわれている[3]．政府工場の払い下げを受けて繊維工場経営に乗り出すもうひとつの典型的な事例は S. A. Fraenkel の場合であろう．先の絨緞工場設立のしばらく後に政府は "Poland" という名の細糸毛織物工場を開設した．ベルギー製16馬力の蒸気機関を装備したこの近代的な工場はやがて Fraenkel に売却され，彼の手で労働者数約700人，機械織機105台，手動織機209台の20年代ワルシャワにおける最大の工場として経営された．しかし1827年に火事に見舞われてからはさしもの近代工場も往時の活況を取り戻すことはなかった（たとえば毛織物生産は1826年の13万5千エルに対し28年は18,150エルと激減している[4]）．その他に代表的な羊毛マニュファクチュアとしては，Koch, Lange, Grohman, Borman 等のものがある[5]．綿のマニュ

1） *Ibid.*, s. 41.
2） 1 korzec（コジェツ）＝30ラスト＝128リットル．
3） *Ibid.*, s. 36—37.
4） *Ibid.*, s. 37—38 および Pawłowska, *op. cit.*, s. 37—38.
5） Łepkowski, *op. cit.*, s. 38.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ファクチュアとしては1824年に60台の織機と166人の労働者を雇用していたMayの工場や，MarymontにあったBereksonが経営するベルギーのコッカリールの機械を装備したキャラコ工場等が存在していた.[1]

ワルシャワでもう一方の重要な工業部門である金属（機械）工業に目を向けてみると，ここでも政府による積極的な活動が目立つ．いくつかの手工業作業場が金属装身具のマニュファクチュアに成長したという例はあったが,[2] 王国成立当初の伝統的なワルシャワ金属業はまだ低い水準にあった．1818年になって初期の代表的なマニュファクチュアのひとつである政府の造幣局が設立された．そこにはペテルスブルクから16馬力の蒸気機関が導入され，貨幣の他に何種類かの細かな金属製品も生産された.[3] 一方1822年から政府はイギリス人T. EvansとJ. Morrisに積極的な援助を与え彼らの鋳物工場設立を助けた．主に金属製農機具製造に従事したEvansの工場では150人の労働者を使用する他60馬力という当時としては大型の蒸気機関も用いている.[4] その他Solecには政府の“Fabryka Machin”があり（1826年設立），29年にはここにも12馬力の蒸気機関が導入された．約100人の労働者によって農機具や蒸気機関が生産されている.[5]

「11月蜂起」以前のこれらの工業の生産量と王国におけるその比重をいくつか表にしてみると次のようになる．第6表の羊毛工業と第7表の綿工業を見ると，ごく一部の製品を除いてワルシャワの繊維工業における地位がさほど重要ではないことが知られる．一方第8表からは特に金属加工業部門におけるワルシャワの重要性がはっきりうかがわれる．

前述のように1830—31年の「11月蜂起」はポーランド王国工業に重大な危機をもたらし特に繊維工業地帯たるウッジ地帯に最大の影響を及ぼしたが，ワル

1） *Ibid.*, s. 38, Pawłowska, *op. cit.*, s. 38.
2） *Ibid.*, s. 38.
3） Łepkowski, *op. cit.*, s. 38.
4） *Ibid.*, s. 39, Pawłowska, *op. cit.*, s. 38.
5） Łepkowski, *op. cit.*, s. 39, Pawłowska, *op. cit.*, s. 38.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

第6表 羊毛工業生産量

(%)

		毛織物(反)				ボア(エル)	毛布(反)	フランネル(反)
		細糸	中糸	太糸	計			
一八二〇年	王国全体	2,710	29,216	135,270	167,196	168,421	3,015	989
	ワルシャワ	500 (18.7)	1,160 (3.9)	3,070 (2.2)	4,730 (2.8)	1,080 (0.6)	2,052 (68.1)	40 (4.0)
一八二七年	王国全体	973,710	1,760,988	3,789,965	6,524,663	364,174		
	ワルシャワ	38,718 (3.9)	40,288 (2.2)	4,040 (0.1)	83,046 (1.2)	1,935 (0.5)		

出所： Łepkowski, *op.cit.*, s.42.

第7表 綿工業生産量(1827年)

(%)

	ハンカチ類(反)	くつ下(組)	精製綿(ポンド)
王国全体	3,929	20,933	50,991
ワルシャワ	255 (6.3)	6,655 (31.3)	7,480 (14.6)

出所： Łepkowki, *op.cit.*, s.43.

第8表 金属工業生産量(1827年)

(%)

	鉄(ツェントナー)						真鍮製品(ツェントナー)
	鋳塊	棒鉄	計	鋳鉄製品	錬鉄製品	計	
王国全体	167,927	104,499	272,426	17,114	17,913	35,027	1,547
ワルシャワ	6,500 (3.9)	2,100 (2.0)	8,600 (3.1)	5,500 (30.7)	4,300 (24.0)	9,800 (27.9)	800 (51.7)

出所： Łepkowski, *op.cit.*, s.44

シャワも同様の苦境を免れることはできなかった．蜂起の影響によるワルシャワ工業の衰退は従来言われてきた程深刻なものではなくその停滞期間も比較的短かかったとの説もあるが[1]，やはり不利な新関税のためにワルシャワの商工業も大きな痛手を受けている．市当局の報告によるとロシアへの輸出は，1829年

1) たとえばŁepkowski, *op. cit.*, s. 45—47.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の1,298,610 złから32年の 607,273 złへと急激に減少している[1]．工業において特に大きな打撃を受けたのはやはり繊維工業，特に羊毛工業で，蜂起後15年間の内に大小の羊毛マニュファクチュアのほとんどすべてが閉鎖に追いこまれたとさえ言われる[2]．

一方金属工業においても繊維工業ほどではなかったが停滞が見られた．前述の Solec の政府の機械工場について見ると，まず1833年にポーランド銀行管理下に置かれ，次いで Perks と Withmor による会社の所有するところとなった．しかし1839年からは再びポーランド銀行の経営に移り，紡績機械や100馬力以下の蒸気機関の生産を続けたが，自ら蒸気機関装備を増やす等の近代化が見られる一方生産縮小のため1839年670人[3]，40年450人，43年280人[4]と雇用労働者数を減らしている．K. Minter をはじめとする他のいくつかの金属工場も同様の苦境に立たされることとなったが，一方で Evans の工場のように比較的順調に発展したところもある．ここには1835年にワルシャワの工場としては初めてガス燈が導入され，43年に蒸気機関1台，機械5台，45年には140人，47年には300人の労信者と2台の蒸気機関が使用されていた[5]．また Bohty（1839年設立），Schuler（1843年設立）の工場のように当時新たに創設された金属マニュファクチュアも存在した[6]．総じて当時ようやく発展の端初が開かれたばかりの金属工業においては，第9表に見られるように繊維工業のような蜂起のドラスティックな影響を受けることなく19世紀前半においては比較的にゆるやかな発展傾向を示すのであり，この部門が近代的資本主義工業として本格的に花開くのはようやく1870年代以降のことである[7]．

1） Szczypiorski, *op. cit.*, s. 18.
2） Łepkowski, *op. cit.*, s. 46.
3） *Ibid.*, s. 48.
4） Szczypiorski, *op. cit.*, s. 19.
5） *Ibid.*, s. 20, Łepkowski, *op. cit.*, s. 48.
6） *Ibid.*, s. 49.
7） 第9表以降ワルシャワ金属工業の生産額は60年代後半ほぼ10万ルーブルで停滞し，1873年14万，74年17万，79年33万ルーブルとそれ以後になって急上昇している．Łukasiewicz, *op. cit.*（第9表出所参照），s. 272.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

第9表 ワルシャワ金属工業の生産額

年　度	工場数.	生産額（千ルーブル）
1848	24	331
1849	22	433
1850	21	470
1851	28	595
1852	26	647
1853	28	560
1854	29	590
1856	28	660
1859	33	841
1862	38	683
1863	34	845
1864	41	887

出所： J .Łukasiewicz, Przewrót techniczny w przemyśle Królestwa Polskiego 1852—1886, Warszawa 1963, s.73, 145.

食品工業では製粉業にさほど影響は見られなかったものの，醸造業では1841年の29から46年の24へと製造所が減少し，生産量に関しても47年にビール・黒ビール合わせて27年の水準のわずか37.4％にしか達していないというありさまであった.[1]

「11月蜂起」以後の時代，王国全体としては50年代にかけて羊毛工業から綿工業へと部門構成の重心を移しかえた繊維工業を中心に工業の再編成が行なわれ，1864年の「農奴解放」を機に本格的な資本主義工業時代を迎えることになる．その繊維工業の中心は言うまでもなくウッジ地帯であり，同地帯の世紀半ばからの発展には目ざましいものがあった．一方同時期ワルシャワはむしろ商業および金融の中心地としての性格を強めてゆくように思われる．国内産の穀物・家畜・麻・羊毛の輸出や，綿・絹・砂糖・アルコール飲料・金属・機械の輸入を通じて新しい商人層が育くまれ，そこに巨大な資本が蓄積されていった.[2] 一方ユダヤ人を中心とする金融業者達も莫大な富を蓄わえている．当時王国全体

1） Łepkowski, *op. cit.*, s. 50.
2） Szczypiorski, *op. cit.*, s. 19.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

で391人の銀行家のうちワルシャワには163人が居住していたという[1].

ワルシャワの工業ももちろん次第に成長しつつあった．40年代以降の政府による工業展示会開催等の後援やポーランド銀行による資金援助あるいは工場の直接経営，ヴィスワ川の蒸気船回船や45年に始まる鉄道の拡大，それにこれらと並行して繊維・金属・食品工業で進展しつつあった技術革新がワルシャワ工業に新しい活気をもたらしたのである．それは極めて幅広い分野にわたる工業の発展を特色としていた．1862年のワルシャワ工業状況を示した第10表からも

第10表　1862年のワルシャワ工業

(%)

	工場数	労働者数(人)	生産額(ルーブル)
革工業	36	565 (10.0)	738,000 (11.9)
煙草工業	5	1,361 (24.0)	1,128,600 (18.4)
食品工業	139	810 (14.3)	2,546,300 (41.2)
化学・建材工業	17	291 (5.1)	218,600 (3.5)
金属工業	43	1,937 (34.8)	1,026,200 (16.6)
その他	78	669 (11.8)	522,110 (8.4)
計	318	5,669 (100)	6,178,800 (100)

出所：　Łepkowski, *op. cit.*, s.71, 72.

その点を確認することができる．この段階のワルシャワ工業は食品・金属を中心に特有の生産構造を形作っている．繊維工業にますます特化・集中してゆくウッジ地帯とはこの点極めて対称的である．

Ⅳ

以上ワルシャワ市の発展とワルシャワ工業の様子を19世紀前半について見てきた．ところでポーランド王国工業成立・発展に極めて大きな役割を果した王国政府の工業育成策とこのワルシャワの発展との関わりはどうであろうか．すでに明らかなようにここにおいても政府の重要性は明らかである．政府は法体系をはじめとする工業発展のための環境作りをしながら，一方自らの手で工業

1)　*Ibid.*, s. 19.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

建設・経営に乗り出した．それらの多くはやがて主要な資本家の手に渡り，彼らによって資本主義的発展がもたらされることになる．さらに彼らの多くは政府の招きによって，あるいはその援助によってワルシャワに集結した人々であって，その資本蓄積にも政府の育成政策や財政援助が深く結合している．すなわち彼らは政府の租税徴収の請負いや一部商品取扱いに対する特権的独占権，あるいは政府・ポーランド銀行からの多額の融資によって巨大な富を築き上げたのであった[1]．その資金は高利貸し等に再投資される一方で，商業や多様な分野の工業への投資も活発に行なわれた．それでもワルシャワの資本家はむしろ商業的・金融的性格が強く純粋な工業企業家といえるものは少ない．その点，一部で商業的性格を合わせもつもののもっぱら繊維工業に自らの経済活動を集中させたウッジ地帯の資本家とは趣きを異にしている．

ワルシャワの資本家は，王国成立以後の新しい資本主義の発展とともに旧勢力を競争の中で打ち負かしながら台頭してきた新しい社会階層を形作っているといえるが，一方で旧来の封建勢力との結合・交流も見られた．あるいは彼らは，政治権力と深く結びついていた旧来の勢力に代わる新しい特権階級と言えるかもしれない．その意味で，そうした古い伝統的勢力の存在せぬ所でいわば純粋に資本主義的資本家ないしは工業家としての成長をとげたウッジの繊維企業家とは，またはっきり異なっている[2]．

しかしながら，ワルシャワおよびその工業の発展とウッジ工業地帯の発展とは，ポーランド王国資本主義工業の成立・発展をその停滞や方向転換をも含めてまさに明確に体現しているという点では大きな共通点をもちあわせている．各々に都市の性格や発展の方向に差があるように見えながら，究極のところでポーランド王国資本主義発展の共通の基盤の上に立っているということができよう．結局ポーランド資本主義工業は，以前の経済改革を引き継いだ初期ポーランド王国政府の育成策によって，資本においても，市場においても，労働力

1） 拙稿〔4〕，160—162頁．
2） 拙稿〔4〕165—166頁．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

においてもその基礎を築かれたのであり[1]，ワルシャワやウッジこ工業発展もこのことを裏づけている．その後両者は各々の個性を鮮明にしながら二大工業地帯として王国資本主義工業の発展を支えていった．王国資本主義工業のもつ可能性と問題点は，ワルシャワとウッジ地帯それぞれ独自の形で現出してくる．それについては稿を改めて分析してみたい．

1） 拙稿〔5〕2—4節参照．

NII-Electronic Library Service